

第四章 先史文化人の形質

第一節 発掘された古人骨

本節では道内各地から発掘された古人骨のうち学史上重要なものを中心にして、概ね年代順に記述していくことにする。なお、混乱を避けるために、市町村名は発掘当時の名称を用いることにする。

北海道で最初の古人骨の発掘例として、大正十五（一九二六）年に長谷部言人と山内清男が室蘭市本輪西ボンナイ遺跡で人骨九体を採集したという記録がある。人骨の帰属年代は明らかでないが、縄文ないし続縄文時代のものと思われる。この人骨は現在、東京大学総合研究博物館に収蔵されている。昭和六年には京都大学の石沢命達が「北見国網走町アイヌ貝塚出土の石器時代人骨」を報告しているが、これは清野収集人骨七五四号に登録されている熟年女性人骨である。オホーツク文化期の人骨であろう。昭和八年には河野広道が、「北海道江別町円形竪穴式墳墓発見の石器時代人」と題した論文を人類学雑誌に寄稿しているが、この人骨は続縄文時代のものである。この頃はまだ北海道の古人骨研究の黎明期で、本格的な人類学的研究が開始されるのは昭和十年代に入ってからである。

十六年から二十三年にかけて、北海道大学解剖学教室が中心になって、網走市モヨロ貝塚の発掘が行われ、大量の古人骨が発見された。この人骨群は、今でいうオホーツク文化期の人骨で、これを詳しく研究した北海道大学の伊藤昌一は「これらの所見によれば、北海道の北部沿岸地方には、日本石器時代人、現代日本人、アイヌ等と著しく異なった種族がかつて住み、貝塚を形成しておいたのである」と結論している。モヨロ貝塚人骨は平成十五年に北海道大学医学部から北海道大学総合博物館に移管された

が、琉球大学の石田肇は、これを「オホーツク文化期人骨の再発見」と称して、精力的に研究を進めている。

昭和二十六年～二十八年には森町尾白内遺跡から三体、三十六年には豊浦町小幌洞窟から七体の続縄文時代恵山期の人骨が発見され、これを鑑定した伊藤昌一は、近代アイヌとよく似ていることを指摘している。三十四年と三十五年には、宗谷岬のオンコロマナイ遺跡と江別市の坊主山遺跡で江別式土器を伴う続縄文時代人骨が約一〇体発見された。保存の良い男性頭蓋二例を当時最新の方法で分析した札幌医科大学の山口敏は、この人骨は北海道東北部や千島のアイヌに類似するばかりでなく、本州の縄文人にも似ていることを明らかにした。このようにすでにこの時期において、アイヌと続縄文人、縄文人が無関係な存在ではないことが認識されていたことは注目してよいであろう。

三十七年から四十二年にかけては、大阪大学解剖学教室の手によって、有珠善光寺遺跡から縄文時代一体、続縄文時代二体、擦文時代三体、室町・桃山時代五体、江戸時代のアイヌ五体の人骨が発掘された。これらの人骨を詳細に分析した大阪大学の欠田早苗は「有珠遺跡では、時代が新しくなると骨格が繊細化し、徐々に近世アイヌに近くなる」と報告している。

三十八年～四十一年には千歳市ウサクマイ遺跡A地点で九体、四十一年には厚岸町下田ノ沢遺跡で一体、五十四年には千歳市末広遺跡から一体の擦文時代人骨が発見されている。いずれにも近世アイヌに連続する特徴が認められることが報告されている。下田ノ沢遺跡の頭蓋は擦文期にあつては例外的に保存状態がよく、近年AMS法による炭素14年代測定が行われている。

四十七年には、島牧村栄磯岩陰遺跡で縄文晩期の人骨四体が発見されたが、そのうちの熟年女性人骨に上顎側切歯一本だけの抜歯があることが、

百々幸雄によって北海道で初めて報告された。この様式の抜歯は本州では縄文中期末から後期にかけて隆盛であったもので、その後北海道では同様の抜歯が、虻田町高砂貝塚、苫小牧市美沢1遺跡、乙部町三ツ谷遺跡、八雲町コタン温泉遺跡、有珠モシリ遺跡、礼文町船泊遺跡、別海町共春遺跡でも確認され、縄文後期から晩期にかけて上顎側切歯を一本だけ抜く抜歯風習が道内に広く行き渡っていたことが判明した。

その他人骨が発見された重要な遺跡を列挙すると、縄文時代では、虻田町高砂貝塚(晩期)、同入江貝塚(前期～後期)、伊達市北黄金貝塚(前期)、千歳市と苫小牧市にまたがる美沢川流域の遺跡群(前期～後期)、八雲町コタン温泉遺跡(前期～後期)、釧路市東釧路貝塚(早・前期)、同緑ヶ岡遺跡と幣舞遺跡(晩期～続縄文期)、礼文島船泊遺跡(後期)がある。礼文島船泊遺跡の人骨は、日本列島最北の縄文人として注目されている。

続縄文時代では、豊浦町礼文華貝塚(恵山期)、室蘭市絵鞆遺跡(恵山期)、常呂町栄浦第1遺跡(宇津内Ⅱb期)、伊達市有珠モシリ遺跡(晩期～恵山期)が重要である。有珠モシリ遺跡では縄文晩期から続縄文恵山期にかけての人骨が大量に発見されただけでなく、南海産のイモガイ製腕輪をはじめ副葬品に目を見張るものがあった。

オホーツク文化期の人骨が発見された遺跡としては、前述のモヨロ貝塚のほかに、稚内市宗谷大岬遺跡、斜里町ウトロ神社山遺跡、礼文島船泊遺跡、同浜中遺跡が挙げられる。

第二節 骨に見る北海道人の系譜

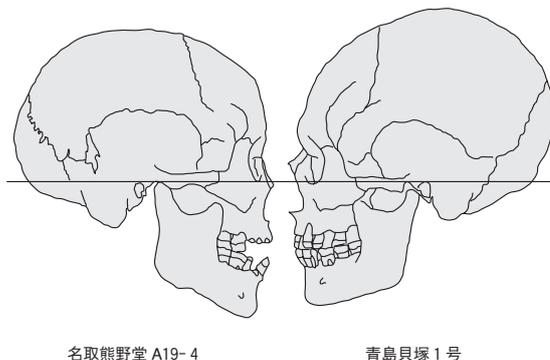
本節では道内先史時代人の地域差、時代差、そして最後に続縄文人の系譜の順に記述する。

東と西の縄文・続縄文人

縄文時代人の頭蓋の特徴は、顔幅が広い割に顔の高さが低く、眼窩を収めている眼窩が低く幅広い長方形をなし、そして何よりも、眉間から鼻背にかけての輪郭が凹凸をなし、顔面が非常に立体的なことである(図4-1)。このような特徴は北海道から九州にいたる縄文人にも共通し、また近世アイヌの頭蓋にも共通するところが多い。しかし詳細にみると地域ごとにある程度の違いが認められることもまた事実である。

石狩低地帯を境にして北海道を南部と北東部に分けてみると、それぞれの地域に居住していた縄文・続縄文人の頭蓋形態に若干の差があることが知られている。昭和五十年代に国立科学博物館の山口敏は、道東北部の縄文・続縄文人の頭蓋は、道南西部の人たちよりも、顔幅に比して顔高が著しく低く、眼窩の高さもかなり低いことを明らかにした。このことは近年、より多くの資料を用いて研究を行った慶応大学の高山博によって追認されている。

このような地域差を示す特徴のひ



名取熊野堂 A19-4

青島貝塚1号

図4-1 古墳人頭蓋(左)と縄文人頭蓋(右)の側面輪郭の比較

とつに、眼窩の相対的な高さを表す眼窩示数がある。図4-2は山口敏が昭和五十四年に報告したもので、縄文時代末期から続縄文時代にかけての人骨について、眼窩示数の個々の値が道南部と道東北部で比較されている。噴火湾沿岸部では眼窩示数が七二・三から九二・五まで大きく広がるのに対して、道東・道北部では七二・一から八二・五までと広がり幅がせまく、概して眼窩の低い個体が多い。このような所見から山口敏や高山博は、道東北地方、とくに釧路周辺の道東地方に北海道固有の縄文・続縄文人の特徴が残されていると考えている。

時代差

縄文時代の初めの頃から近世アイヌ文化期までの人骨を時代ごとと比較できるのは、現在のところ道内では、噴火湾沿岸部においてほかはない。図4-3は平成二年に百々がまとめたもので、噴火湾沿岸部の縄文前期から擦文時代にかけての遺跡から出土した人骨それぞれについて、上顔高（下顎を除いた頭蓋の顔面部の上下の長さ）の相対的な大きさを表す上顔示数を年代順に並べてある。上顔示数の平均値は縄文前期から晩期まではほとんど変わらずに推移し、顔面の高さに大きな変化はなかったが、続縄文

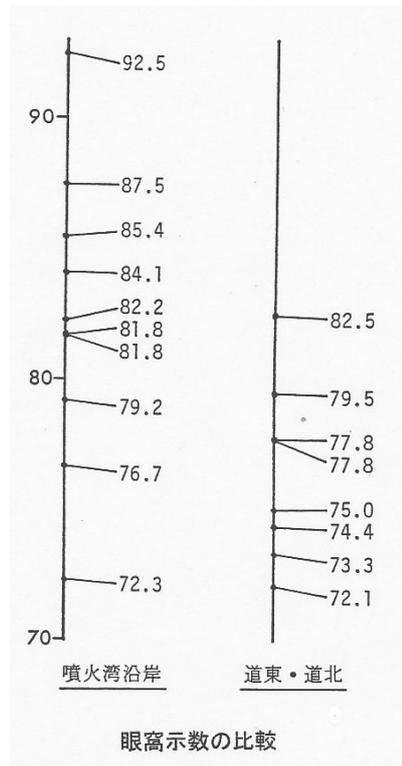


図4-2 噴火湾沿岸地域と道東・道北地方の縄文末～続縄文人頭蓋の眼窩示数の比較（山口敏1979）
（眼窩示数＝眼窩高/眼窩幅×100）

時代になると各個体が生ずる値の変異の幅が増加するとともに平均値も大きくなり、縄文人よりもやや顔が長くなって、近世アイヌの上顔示数とほぼ同じになっている。噴火湾沿岸部に限ってみた場合であるが、このように縄文時代から続縄文時代にかけて頭蓋の形態にやや変化がおこり、続縄文人は多様化する。同時に、近世アイヌに近づいていく様子がみてとれる。このことは次の続縄文人の系譜の項でさらに明確になる。

続縄文人の系譜

北海道の続縄文人骨の形態が多様性を増しながらも、全体としてみると徐々に近世の北海道アイヌに近づいていったことはすでに、北海道の古人骨研究の先駆者である山口敏によって指摘されていた。その後、昭和六十年から平成元年にかけて実施された伊達市有珠モシリ遺跡の発掘調査でまとまった数の続縄文人骨が発見されたのを機に、百々等は数年間、道内各地の続縄文人骨をことごとく調査する作業に取り組んだ。保存状態良好な続縄文人骨三〇例を探し出し、頭蓋の計測的、非計測的特徴を徹底的に研

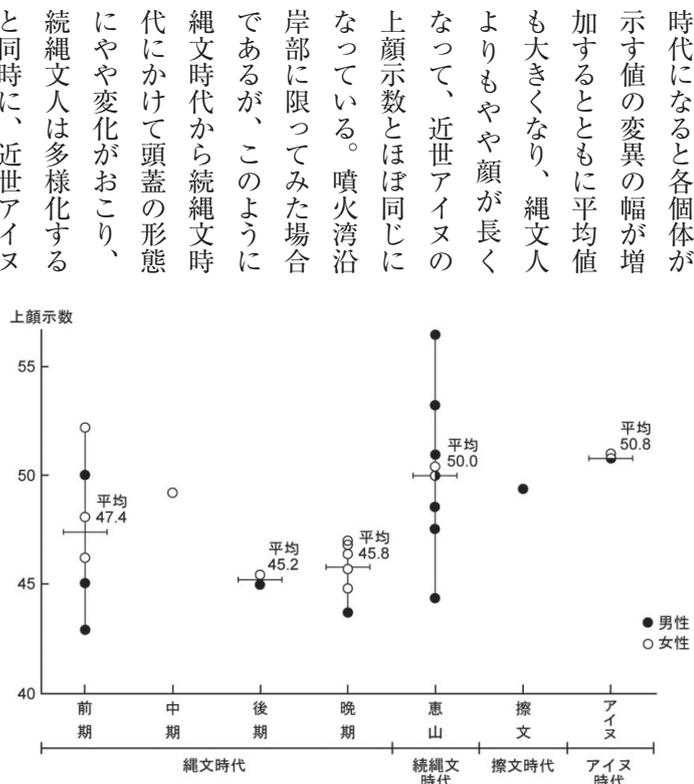


図4-3 噴火湾沿岸地域における上顔示数の時代的変化（百々幸雄1990）
（上顔示数＝上顔高/頬骨弓幅×100）

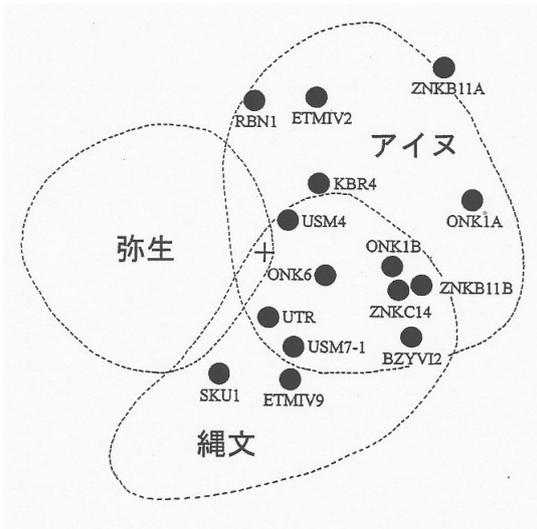


図4-4 北海道の続縄文人男性頭蓋15例の縄文人、北海道アイヌ、北部九州弥生人への正準判別分析の結果 (Dodo and Kawakubo, 2002)
 (BZY: 坊主山、ETM: エトモ、KBR: 小幌、ONK: オンコロマナイ、RBN: 礼文華、SKU: 栄浦第1、USM: 有珠モシリ、UTR: ウトロ、ZNK: 有珠善光寺)

究した。研究成果は二〇〇二年に『Anthropological Science』に発表したが、それによると頭蓋の計測的特徴においても、非計測的特徴においても、北海道の続縄文人は東日本や西日本の縄文人と北海道アイヌの中間に位置し、縄文人から北海道アイヌへの移行過程にあった人たちであると考えてさしつかえないことが明らかであった。

この研究成果の一部を図4-4に示した。一二項目以上の計測が可能であった一五例の続縄文人男性頭蓋が、縄文人、北海道アイヌ、北部九州の弥生人のいずれの集団に帰属するかを判別分析で調べた結果である。続縄文人のどの個体も弥生人に判別されるものではなく、縄文人とアイヌの分布範囲に広く散布している。この結果は、続縄文人は形態的に多様性には富んでいるが、全体的にみれば、縄文時代人から北海道アイヌへの移行状態にあった人びとであることを示している。従来考えられてきたように、やはり北海道のアイヌは、日本列島の縄文人や北海道の続縄文人を母体にして成立した集団と考えて大過ないであろう。